

奈良県「ヘラノキ」の起源について

川端 一弘

日本科学史学会生物学史分科会 生物学史研究 No.73 別刷

2004年9月

奈良県「ヘラノキ」の起源について*

川端 一弘**

ヘラノキ (*Tilia Kiusiana* Makino et Shirasawa) は、牧野富太郎 (1896) と白沢保美 (1900) により新種の報告がおこなわれ、当時確認された生育地の九州が学名に用いられている。牧野は東京で栽培されていたヘラノキ (亀戸天神、菟蓐閻魔境内) により新種紹介をし、学名を記載しているがその一文は簡略である。詳細な新種記載は白沢の論文によりなされている。白沢は産地として日向、豊後、豊前、筑紫、肥後の名をあげている。その生育地範囲は、低地から標高600mまでの高低を記載している。牧野や白沢はヘラノキの和名は『大和本草』より得たことを記しており、白沢は『草木図説』『古名録』等の江戸時代の文献を参照している。……

近畿地方のヘラノキは、京都大学総合博物館 (以下KYOと略称する) に「三木茂 大和 吉野 cult, 1922.6.19」⁽¹⁾、「小泉源一・岡本勇治 高見村鷲家日張山間, 1922.10.16」の標本があり、これらが初見だと思われる。しかし、この発見は何故か広く知られることがなかった。

従前は、昭和8年 (1933) 宇智郡北宇智村出屋敷 (現五條市) において発見されたものが最初とされている。

さらに昭和10年、久米道民らにより宇智郡大阿太村佐名伝 (現大淀町佐名伝) においても発見された。久米は「奈良県ノへらのきト其形態ニツイテ」(1937) を発表し、この発見に至る経緯ならびにヘラノキの形態を記載している。この後の奈良県のヘラノキ記載は、久米の論考を下敷きにしたものが多い。

筆者はたまたま吉野町色生において初めてヘラノキを知り、これを契機として県内のヘラノキの生育分布調査を行い、文献の調査を行った。分布調査の結果からは、ヘラノキが奈良県産植物としては特異な分布域をもち、文献の調査からはヘラノキが植栽されたものであるという結果を得た。以下にその歴史的背景を検証して、奈良県のヘラノキは植栽起源をもち、野生化したものであることを明らかにしたい。

奈良県における文献記録

奈良県のヘラノキについて最初に記載があるのは久米道民 (1937)、ならびに『大和植物志』(1937) である。『大和植物志』の記載は久米や松村義敏により追加されたものである⁽²⁾。

久米は

へらのき (*Tilia kiusiana* Makino et Shirasawa) ハ九州各地 (日向・豊前・豊後・筑

* 2003年11月12日受理

** 〒631-0045 奈良市千代ヶ丘3-1-60

後・肥前等)・四国西部(伊予)ニ産スル暖地性植物テ尚本州(中国ノ一部)ニモ之ヲ産スルコトガ記サレテイルガ、コレ等ノ地方カラ遠ク隔ツタ奈良県ニ産スルコトハ未ダ一般ニ知ラレテイナイノテ同地方ニ於ケル本植物ノ生育状態ト形態トニ就イテ述ベヨウト思フ。

奈良県ニコノ植物ノ生育スルコトハ昭和九年其当時奈良県立五條高等女学校教諭デアツタ今西岩太郎氏ニヨツテ其郷里同宇智郡北宇智村大字出屋敷字垣内ニアル俗称とくをのきガへらのきデアルコトヲ注意セラレタ。同地ニ於イテハ人家附近特ニ竹藪ノ周囲等ニ生ジ、大小二十数本アツテ其最モ大ナルモノハ目通り1米、高サ約7米位(ソレヨリ上ハ切斷セラレテイル)デアル。コノ場所ニ於ケルモノハ生育ノ状態カラ見テ自生デアルカ又ハ栽植セラレタモノカガ明テナイ。元来コノ植物ハ九州地方デハ其樹皮ノ靱皮纖維ガ強靱ナ為同科ノしなのきト同ジヤウニコレヲ利用シテイルガ、コノ地方ノ人ハ別ニコノ植物ノ利用法ヲ知ラナイ。又コレガ栽植サレタ模様モナク尚後述スルヤウニコノ附近ニ更ニ本植物ノ他ノ生育地ノアルコト等カラ見テコノ地方ノモノモ自生ト見ルベキデハナカラウカ。

其後昭和十年八月筆者ハ奈良県女子師範学校教諭石原重次氏ト共ニ同県同郡大阿太村大字東阿田字佐名伝ノ吉野川沿岸山林中ニ本植物ノ群生地ヲ見出シタ。コノ地ノへらのきハくぬぎ・こなら・ならがしは等ノ雑木林及すぎ林内ニ数十本生育シ、何レモ薪炭材トシテ他ノ樹木ト共ニ伐採セラレテ切株ヨリ多数ノ新幹ヲ生ジ大ナルモノハ切株ノ周囲約2米ニ達スルモノモアルガ、新幹ノ高サハシバシバ伐採セラレル為ニ一般ニ甚ダ低ク、近年伐採ヲ免レタモノモ高サ漸ク6米位ニ過ギナイ、然シ其切株ノ太サカラ見テ其年代ハ相当古ク伐採前ニハ見事ナへらのきノ群落ヲナシタモノデ、附近ノ状態カラ見テ恐ラク自生セルモノト考ヘラレル。尚更ニ詳シク調査スレバコノ附近ノ他ノ地方ニモコノ植物ノ生育地ヲ見

出シ得ルモノト信ズル。

と報告している。

へらのきは、今西岩太郎の発見地が人家の近くであったため、久米は植栽された可能性について言及し、同地の人がその利用法を知らず、また植栽した様子もみられず、その後の発見地の状況を考慮して自生であろうとしている。

『大和植物志』には「へらのき 北宇智村出屋敷(1933今西採)」とある。久米は今西が採集したのは昭和9年(1934)のこととしている。

KYOには、「採集者不明 1933.6.」の標本がある。台紙には「宇智郡北宇智村字出屋敷 分布ニ付イテ受給リタシ」という小さな張り紙がされている。推察するに、この張り紙は、久米が京都大学に標本を送り問い合わせたものと思われる。本来ならば岡本勇治に問い合わせるものであろうが、岡本は腎臓病で大阪日赤病院に入院加療中であり、昭和8年7月29日に亡くなっている⁽³⁾。京都大学の小泉源一からの返信はなかったようである。久米の昭和9年の記載は誤解である。

また大阿太村佐名伝でのへらのき発見の情報を聞いた桑島正二は、昭和10年秋にこの大阿太

村を訪れ、大阪市立自然史博物館（以下OSAと略称）に標本を残している。

近畿地方でのヘラノキの報告は、他に中井猛之進（1941）の記載が見られる。中井は「植物学ヲ学ブモノハ一度ハ京大ノ芦生演習林ヲ見ルベシ」において「演習林ニ行ク迄ノ路傍デ」見られる植物をあげ、そのなかにヘラノキを記載し「関東者ニ珍ラシイモノガ採レル」としている。京都府由良川上流域にヘラノキが生育することを報告している。しかし筆者の調査によれば、KYOには芦生のシナノキの標本は存在するがヘラノキの標本が見られない。中井の報告は標本による裏付けが得られず、温帯地域である芦生附近のヘラノキ記載には疑問がある。

戦後の記録

久米が予想したごとく戦後はヘラノキの発見がつつき、OSAの標本に、また奈良県の市町村史、奈良植物研究会会報、同会誌などに記録されている。その記録を以下に年代を追って記載する。

堀勝（1955）下市町丹生・丹生川上神社下社・OSA、小清水卓二（1959）榛原町内牧・同自明・同石田、小清水（1961）十津川村上湯川字市原（岩田重夫は隣の字大檜曾としている）、田中太右エ門（1977）菟田野町平井、森本喜興（1987）菟田野町宇賀志（桑島正二・OSA）、瀬戸剛（1995）下市町長谷・OSA、竹村咏子（1996）大宇陀町本郷、森本範正（2002）西吉野村唐戸・下市町平原・OSA、楠瀬雄三（2002）八滝（平野弘二、森本・OSA）である（重複記載、植栽と思われるものを除外した。なお岩田は丹生川上神社中社を記載しているが、後年には丹生川上神社下社に訂正している）。

さらに『六甲山地の植物誌』（1998）では六甲山系でもヘラノキが発見されたことが記録されている。福岡誠行・1989.6.18・KYO、小林禧樹・1989.8.4・KYO

記録のうちヘラノキの成育状況に触れているものを抜き出すと、小清水（1959）は「今回榛原地帯の調査によって、内牧の宮崎氏裏藪、自明初生寺や、初生の八久保氏の藪の中、石田の笹岡氏の裏山等に目通一米内外のヘラノキが数本宛ある事がわかった。このヘラノキは、他から移植して繁殖したものか、或は自然分布の残存かに就いては明確に判定できないが、北宇智の自生から見るとこれらも恐らく自然分布の残存と考えられる。内牧の宮崎氏は、ヘラノキを古くからトクオノキと呼び、先代から樹幹の木質部を薄く剥いで繊維材料として使用しているとの事である。」とし、田中（1977）は「(前略) このヘラノキ林が自生か植栽かについて、地元の古老にきいてみたが、なんら究明の端緒はつかめなかった。つまり、彼等は口をそろえてこの木は昔からここにあったし、先代たちからなにも語りつがれていないという。」と報告している。

奈良県のヘラノキについては、本来自生していたものか否かについて、このように発見数が少なく、文献記録からは明確になしえなかった。

ヘラノキの分布調査

筆者が調査を行い、ヘラノキを確認した地点は以下の場所である。同じ字で複数箇所の生育を確認したものもある。

榛原町長峯、同諸木野、同内牧、同上内牧

大宇陀町大東、同守道、同白鳥居、同大熊、同栗野、同牧、同田原、同本郷、同オヶ辻
菟田野町見田、同平井、同東郷、同駒帰、同宇賀志、同佐倉

吉野町色生、同小名字北谷

東吉野村小川字鷺家谷、同小川字船津垣内

川上村井光

西吉野村西野、同十日市

五條市小山町

下市町丹生字日受垣内

十津川村出谷錨谷

である。ヘラノキの由来を聞き取り調査したものは、全て樹名さえ知らないという結果であった。標本はOSAに納めている。

ヘラノキの生育環境はその多くが川岸で見られ、一部には二次林にも見られる。野生の状態ですべて生育している。植栽されたものには、東吉野村高見小学校に見事なヘラノキの大木がある。奈良県に現存するものでは一番の大木であろう。来歴については不明である。

現在確認できているヘラノキの生育地の分布は、十津川村の一地域、宇陀川上流域(宇陀川、内牧川、芳野川)と吉野川流域の一部と支流域(津風呂川、高見川、丹生川、宇智川)である(筆者は、下流の紀ノ川流域も三年にわたり調査したが、発見できていない)。この分布域は、他の奈良県植物の分布域と比較すると特異な分布域を示す。よく使われる小泉源一が命名した襲速紀(そはやき)要素(1922年、雑誌『山嶽』1号.大和山岳会に「大和の山嶽」として発表した。中央構造線の外帯、南九州・熊襲、四国・速水の戸、紀伊半島の地域を指し、その地域に生育する、もしくは分布域の中心があると考えられる植物をいう)にも当てはまらず、奈良県の植物区系のいずれにも当てはまらない。しかも大宇陀町や菟田野町では、かなり高密度の分布を見ることができる。

近隣の府県では六甲山の一部に知られるのみであり、こちらも特異である。

ヘラノキの果実は名前の由来となった苞に着いたまま落下する。種子の拡散は風による拡散である。生育地の多くが川岸であることから水流に乗って下流に運ばれることも考えられる。こうしたことを考慮すれば、ヘラノキの分布域がもう少し広範囲なものであってもよいと思われる。

いずれにしても筆者の調査により判明した奈良近辺の生育地の範囲からは、他の植物と違っ

た特異な分布域を読みとれる。この分布の特異さを考慮しつつ、以下にヘラノキについて文献からのアプローチを行ってみたい。

ヘラノキ記載の歴史的展開

ヘラノキが文献の最初にみられるのは『大和本草』である。貝原益軒『大和本草卷之十二』には

へらの木(和品)葉は椋の木、桑及木槿に似たり。長ぜんとする時、早く其株を切れば、一根より多く叢生す。小なる時不切、一株長ずれば、大木となる。椋の木の叢生あり。喬木あるが如し。其皮を剥て、麻を製する如にして縄とす。農夫是を以て馬具に作る。又農夫皮を以て腰囊につくる。又これを以てむしろをおる糸とす。本草喬木類に莢遂あり。葉似木槿小樹。皮堪為索といへり。疑らくは是なるべし。葉の間より菩提子の如なる薄葉生じて、其薄葉の半より実なること、恰如菩提子奇物なり。其薄葉及実形如此。

とある。

貝原益軒(1630-1714)は九州博多の黒田藩に仕え、京都にて朱子学や本草学を学んだ。帰郷後は儒者として藩主や藩士に講義を行った。著書として『養生訓』『女大学』『和俗童子訓』等が著名であるが、本草にも造詣が深く『大和本草』の著作がある。

この「へらの木」の記載は、ヘラノキが九州地方での呼称であり、益軒の拠点が九州であることから、現在のヘラノキ(*Tilia kiusiana* Makino et Shirasawa)を指している。ところが小野蘭山述『大和本草批正』地之巻 雑木類には

ヘラノ木 シナノキナリ、南部ニテマダノキト云大木ナリ葉形桑ニ近シ、木槿ムクノキニハ似ス、コレ和産ノ菩提樹ナリ、葉圓ニシテ扁ク頭尖リアフヒノ如ニシテ細鋸アリ互生ス、奥州ヨリ来ル、クシカヒヲツナギタルハ此樹皮ナリ、[莢遂]救荒本艸ニ形状詳ナリ小木ナリ、ガマズミニ充ベシ、本草ニテハ喬木ニ入ル、非ナリ、○薄葉ハ即蒂ナリ、莖ハ蒂ヨリ長シ、枝ヲ分テ花実生ス、真ノ菩提樹ハ一般ナリ、国ニヨリ真ノ菩提樹ト葉形相同シキアリ

とし、ヘラノキとシナノキ [*Tilia japonica* (Miq.) Simonkai] が同一のものであるとした⁽⁴⁾。京都を本拠としている小野蘭山(1729-1810)は、白井光太郎(1933)が指摘しているようにヘラノキを知らなかったためシナノキと同じだとしたのであろう。「マダノキ」とは奥州地方のシナノキの方言であり、南部とは南部地方をさすのであろう。葉が丸みを帯びているシナノキの特徴を記載しており、蘭山がヘラノキを見聞していたとは思えない。

蘭山がシナノキとヘラノキを同一としたことを受けて、岩崎灌園『本草図譜』(配本文政十三年[1830]-弘化元年[1844])では「シナノキ」は「シナノカワノキ 紀州」「ヘラノキ 九州」「マタノキ 奥州」と方言名を記載している。山本亡羊が「菩提樹」と朱注を記した伝本があり、菩提樹とも区別がなされないこともあった⁽⁵⁾。灌園は紀州では「シナノカワノキ」の方言で

呼ばれていることを記している。

シナノカワノキの呼称は、この『本草図譜』が初見である。天保十年(1839)『紀伊続風土記』(1910→1990)の物産の部には「之奈乃木 牟婁郡にてシナノカハムキ 又ヘラノ木 牟婁郡山中に自生多し」とあり、「シナノカワノキ」の呼称と関係があるものと推察される。灌園が紀州より何らかの情報を得ていたと思われる。

『紀伊続風土記』の物産の部の編纂については、小原良貴(桃洞)(1746-1825)が関与し、桃洞の没後に孫の小原良直や仁井田好古により完成をした。桃洞に師事し小野蘭山の学風を受け継いだと云われる畔田伴存(翠山)(1792-1859)の業績による貢献があったようである⁽⁶⁾。

しかし、伴存は『和州吉野郡中物産志』弘化四年ころ(1847)において「菩提樹 シナノキ 善鬼山其の他の山中にあり」とし⁽⁷⁾、『熊野物産初志』(1848)では「シナノ木 菩提樹一種 山中ニ生ス 樹丈余葉桑葉ニ似テ末尖リ互生ス 細ク深キ鋸齒アリ『大和本草』ニ載ルヘラノ木也」としている。『紀伊続風土記』に記載された「シナノカワハムキ」について、伴存は何故か触れていない。「牟婁郡中に自生多し」とあり、紀伊半島の山野を踏破した伴存が、その利用を示す呼称に触れていないのは不思議である。また、伴存は灌園と同時代の人であるが、『本草図譜』に接していない可能性は大きい。

本題から逸れるが、本草書等に記載があるため「紀伊のシナノキ」について、現在の生育状況を示しておきたい。前述したが、和歌山県にヘラノキの生育報告はない(ヘラノキは暖帯性の木本であり、シナノキは温帯性のものである)。シナノキについても情報は大変少ない。OSAには和歌山県産の標本はなく、和歌山県立自然博物館に護摩壇山頂付近(約1300m)と白口峯(約1100m)の標本2点があるのみである。いずれも奈良県境と接している地点である。記録には宇井縫蔵『紀州植物誌』(1931)に白口峯とあるのみである(標本での確認がとれていない)。しかし、紀州藩の支配地は現和歌山県のみならず三重県や奈良県の一部におよんでおり、大台ヶ原付近も紀州藩に含められることがあり、注7に示したようにシナノキの報告がされている。

『紀伊続風土記』の「牟婁郡山中」は現和歌山県に限定することではない。「ヘラノ木」については、ヘラノキをシナノキの方言とした蘭山の学説を踏襲したものであろう。

さらに「紀州のシナノキ」については、以下の田中壤の記述においても再び検証したい。

明治になると、明治政府は全国を中央集権的に統治する必要から各種の統一した資料の必要性に迫られた。そこで内務省地理局を中心に各種の調査を行っている。田中壤は地理局の命を受け、田中が初めて呼称した植物帯別に日本の樹木の現状を報告した(1887)。

そこには「副用樹栽植の帯位ヲ示ス」とあり、「副用樹トハ樹木ノ本幹ヲ用ヒズ樹皮、葉、実、等ヲ使用スルモノニ名ツク」との説明のもとに「シナノキ」があげられている。(句読点は筆者加筆)

シナノキハ筑前ニテハ之ヲ第二帯中ニ植ユ、陸羽地方ニテハ第三帯中ニアリ(筑前ニ在ルモノハヘラノキト云、シナノキ一種小葉ナルモノナリ)

とあり、各樹木を個別に詳細な説明した箇所では、

シナノキ 陸羽地方殊ニ羽後、陸中等最モ多ク之ヲ植ユ、其方林ヲ造ルニ非ス、唯人家ノ周囲ニ植ヘテ藩籬ニ代ヘ又畦畔等ニ植ユ、筑前及豊前ニモ亦之ヲ栽培スル者アリ、紀州其他ノ諸州往々之ヲ見ルモ多カラス、其陸羽地方ニアルモノハ大葉ニシテ方言マダト云、共ニ其皮ヲ剥テ席表ノ経糸及繩、粗布ヲ作ル

此樹ノ植付方ハ陸羽地方ニテハ概ネ仲春分根法ヲ用ユ、該地方竹ヲ産セス（コザサノ類ハコレアリ）故ニ剥皮ノ後ハ其幹ヲ竹竿ニ代用セシムルヲ以テ務メテ冗枝ヲ除キ幹身ヲ直暢セシメ一回伐採後ハ（伐レハ又萌芽ス）三四年毎ニ伐採ス、其間ニ凡経一寸ヨリ二寸ニ至ルト云、筑前ニテハ十年毎ニ伐採ス、周囲凡一尺七八寸ニ至ル（但初伐ハ十二年ニシテ周囲一尺二三寸トナル）良樹ナレハ周囲三尺ノ木ニテ凡二貫目以上ノ糸ヲ得ルト云、且ツ幹ノ皮ヲ剥キタルモノハ木履ヲ作ル

筑前ニテ皮ヲ製スルハ夏季五六月ノ候幹ヲ伐採シ直ニ皮ヲ剥キテ水ニ浸シ（五月ナレハ三十日間六月後ナレハ二十日或ハ十五日間水ニ浸ス）而後之ヲ洗ヘハ表皮脱除ス、之ヲ日光ニ曝スコト一二日間ニシテ繩等ヲ製ス

田中壤が記載した九州地方のものはヘラノキであり、陸羽地方のものはシナノキである。文中には「紀州其の他の諸州」云々とある。田中は「南海道植物帯調査報告」（1882）では、巻末の「南海道樹類統計並方言表」で「右第三帯中ニ生スル者」の紀州のなかに「シナノキ」をあげている。田中がいう植物帯の第三帯とは「山毛櫨帯」（以下ブナ帯とする）をいう。紀州のブナ帯の「分明ナルモノ」は「果無嶺 二千五百尺」とし、「南海道植物帯位置図」では護摩壇山を中心とする奈良県との県境付近一帯、ならびに大台ヶ原山系を図示している。田中は紀州・四国では、阿州剣山二千四百尺、予州石鏡山二千五百尺等とブナ帯を標高約750m付近より設定している。田中が示したブナ帯にシナノキが前述したように生育していた可能性は高い。「右紀州ノ部ニ樹種絶跡ノ点ヲ記セサルハ州中ノ最高点五千尺ナル大台ヶ岳ノ頂上迄皆能ク繁生スルヲ得ルモノナレハナリ」とあり、大台ヶ原を紀州ブナ帯に含めているためである。そのために田中がいう紀州のシナノキの生育地を特定することは困難である。

田中が記述する「紀州」とは、本草書等で示された「紀州」と符合している。現行政区域との相違については注意を要する。

トクオノキについて

本草書や田中壤の調査報告には、奈良県（大和）における記載がないヘラノキ（シナノキ）である。ところが久米や小清水の奈良県のヘラノキ記載には、別名の「トクオノキ」という名がみえる。「トクオノキ」とは「徳苧の木」のことであり、大蔵永常（1768-1860?）が命名したものである。

『老農茶話』文化七年（1804）には「徳苧の木を植る事」の記事がみえる。徳苧の木の由来に

つについては、(以下、大蔵永常の著書については『大分県先哲叢書大蔵永常』より引用する)

筑紫にて専らへらと云つる木の皮をとりて芋の替りに用ゆ、甚弁利よきもの故畿内関東へうつし植て農家の助にもやならんと、爰に其利得を記してす、むるものなり、されば此木の本来しる人なければ只へらとのミ云習ハせり、按るに西国の詞にて物を批ぐに一へら二へら批ぐと云り、此木の皮ハ紙を重たるごとく批るもの故斯云歟又へらへらと批るものゆえへらと云か、何れにも其所にて云来りたる詞と思はるれ共此名何とやらん聞侍れば、先此木第一皮をとりて芋となし、其後の木ハ稲の干台に能ものなれば体やう全備ハリ、皮も木も両用とも財錢をついやさずして用を達すれば芋よりも増りたる徳あるものゆえ、今俗にわたりやすきやうに徳芋の木と号侍(漢名吟味ハ暫本艸家物産家にゆづり置ぬ)

としている。徳芋の木とは、芋として有用な木であるから、一般人に分かり易いようにと名付けたというのである。豊田寛三他著(2002)には「徳芋の木とは、大分県でいうヘラノキのことで、白井光太郎の説のように、ヘラノキの別名ということになる。」とある。「トクオノキ」の名称は、永常の出身地である大分県では使用されていなかった。永常は「筑紫にて専らへらと云つる木の皮」としており、大分県での生育を知らなかった可能性がある。以下に論述するが「トクオノキ」とは、奈良県の一部にのみ流布した、永常の命名した名前である。漢名吟味云々については、益軒が『大和本草』において、(和品)即ち日本産としたことに永常が通曉しておらないことが分かる。

奈良県のヘラノキについては、永常の『老農茶話』が影響していることが判明する。そこで以下に『老農茶話』の歴史的背景について論述したい。

大蔵永常『老農茶話』について

『老農茶話』には、文末に

右の筆記受和園のぬし之津から携来て、予に示す、吾これを聞するに民に益ある事の偉なるを感ず、はたか、る一草稿のむなしく筐篋の底に埋もれむも変和の環にひとしければ、われ玉人に比せんとにはあらされとも其環を埋めて世の寶たらしめんと、これを梓にのほせて家に蔵む志ある農夫のこふものあらは、即紙上にもものし与ふへしと、文化紀元甲子孟秋下浣源但季識

とあり、「受和園」すなわち永常が大分から『老農茶話』の原稿を携えきて、池田仙九郎但季に披露した。池田但季は、この書は農民に利益のあるものであるため出版し、求めに応じて配布するというのである。文化元年(1804)の秋に但季はこの跋文を記している。

但季は、この年には五條代官所代官であった。『西口町月行事 宝暦七年～明治四十二年』(『五條市史 史料』所収)には「一、亥三月此度大坂表より御代官池田仙九郎様當三月廿一日御所町御泊りニ而翌廿二日御陣屋に御入被為遊候」文化七年八月六日御代官池田仙九郎様御陣家御勤役相替りニて御出立被遊候」とあり、『御代官名前付帳』(『五條市史 史料』所収)には「池

田仙九郎様 享和三亥年より御支配文化六巳年迄」とある。藤井正英（1994）は、他の資料をも考慮して、但季は享和三年（1803）から文化七年（1810）まで五條代官所代官を務めただろうとしている。跋文からは、永常が五條代官になった但季を訪れて原稿を示したことになる。

永常は明和五年（1768）に豊後国日田に生まれた。寛政八年（1796）に永常は故郷を離れ大阪に出た。大阪での永常の活動については早川孝太郎（1943）等の考察があり、早川は「何処迄信じられるか判らぬが、大阪に出た当時は、土方をして暮して居たとの噂も、その郷里には伝へられて居た。苗木の取次販売に携って居たのも、おそらく所期の行動ではなく、一面には当座の生活を凌ぐ便宜と見る方が正しいと思はれる。」としている。

永常はこの大阪時代に但季と、また奥野秀辰、荒井公廉（奥野は『農家益』序文、荒井は後序の著者）と知り合ったようである⁽⁸⁾。

さらに『老農茶話』の徳苧の木の一節には以下の文がある。

予多年此徳苧の用ひかた多き事を考見るに、葛布よりも製心やすければ実に有益の物也、九州辺鄙など今に此心付なきハ、是全く農務に事繁く又今日の勤に迫る、故なるらん、世の中に廃るものなしといえる、故人の言ありとかねて聞しに、今此徳苧の民に益あるを視て其言の違ざるを感じぬ、予が家に此徳苧布并に徳苧樹の苗等も求め置ぬ、若やうつし植て試る人もあらば難波の浦のよしやあしやハおのづから知らせ給はんともふすことしかり
永常は蘆苗等とともにヘラノキの苗を取次販売を行っていたと考えられ⁽⁹⁾、但季は『農家益』における蘆栽培とともに、『老農茶話』の稲の掛干し、除蝗法、ヘラノキの栽培を、農家に益のあるものとして推賞したのであろう。ヘラノキの苗も取り寄せたと思われる。

この『老農茶話』について、平井義人（2000）は「匡郭に割れがないことから、初版と判断できる板本を確認することはできたが、跋年（文化元年・1804）しか書かれていないため、それが初年にあたるか否かは覚束無い。一連の作品の中でこの作品のみ、いわゆる官版として出版された。」としている。

五條代官但季が刊行した目的については、『除蝗録』文政九年（1826）に以下の記載がある。

予も此蝗災をなげき、先年老農茶話と号して是を除の方を、文化紀元のとし和州の懸（ママ）令へ書して献りしに、速も梓にあげ給ひて部下にあたへ給ひけるが、其板焼失してなすと承り、予再び豊稼録と題して開板なしぬれども、猶くハしくこたび此書を偏（ママ）ず、

その『豊稼録』文化七年（1810）には、

惣て此掛干の事ハ文化紀元の頃、除蝗の方其餘農家の助になるべき事どもを書集め、大和の縣令江奉りしに梓になし給ひ、老農茶話と号し部下へあたへ給ひし事あり、とある。但季が官版した目的は「部下へあたへ給ひし」と明確に表現されている。

『除蝗録』によると『老農茶話』は刊行後にその版木が焼失して、再版が不可能になったため『豊稼録』を刊行したという。『老農茶話』は多くは流布しなかったようである。平井は「本書

の板木が早い時期に焼失してしまったことがわかる。そのことが当時の流布本が希少であることの主な理由であろう。」としている。

『老農茶話』が但季の任地である五條代官所支配地の極限られた地域にしか流布しなかったことが推量できる。つまりトクオノキの呼称は、奈良県の限られた地域にしか流布しなかったと考慮できうる。

六年後に刊行された『豊稼録』には、稲の掛干しや除蝗については記事となっているが、徳苧の木については其餘とあり、すでに具体的な徳苧の木について記載はなくなっている。稲の掛干しについては『豊稼録』に、除蝗については『除蝗録』に、より発展した内容で刊行されている。しかし、永常が以後再び徳苧の木を取り上げることはなかった。『老農茶話』の再版がなかった理由でもあろう。

田中壤が「筑前ニテ八十年毎ニ伐採ス」と見聞したように、ヘラノキの収穫までには長い年月が必要であった。そのために、植栽したヘラノキでは、有用樹として定着広まることはなかったようである。

むすび

ヘラノキの分布調査で判明したように、この木は奈良県では特異な生育分布域を持つ。この分布域は、徳川幕府の天領と符合している。

奈良県における徳川幕府の天領の統治については、その変遷がめまぐるしく詳細に知り得ないが、明治初年の史料『奈良県史料二』に、幕末の幕府領支配地が、村名をあげて詳細に記載されている。この史料をもとにし、調査したヘラノキの分布と照合してみることにした。

『奈良県史料二』の村名より、ヘラノキ分布域と符合する現字名を検討すると、「元代官中村勘兵衛支配地」と「元代官角倉与一支配地」（『奈良県史料一』には角倉与市とある）が符合することが判明した。

代官中村勘兵衛は『御代官名前付帳』に「二見村領御陣屋中村勘兵衛様 元治元子年二月より御支配并慶応四年正月迄」とあり、徳川幕府最後の五條代官所代官である。

五條代官所支配地は、代官所が設立された寛政七年（1775）以降多少の増加があるようであるが、池田但季時代と大きな変化はないようである。ヘラノキが分布する吉野郡域と、菟田野町宇賀志、佐倉、帰駒、東郷、大宇陀町栗野、牧、田原、小和田（大熊を含む？）を含めた地域が五條代官所支配地域にあたる。

角倉与一の支配地は、五條代官所支配地に隣接する旧松山藩の地域らしいが、角倉や代官所名については不明である（『慶應三年 上新町諸職人諸商売書上帳』[天理図書館所蔵文書、『大宇陀町史史料』所収]には、上申先として「角倉与一様 御役所」とある）。松山藩は、元禄八年（1695）に織田家がお取りつぶしとなり、廃藩以後は天領となった。いま幕府天領の支配形態を記述する余裕はないが、延享元年（1744）に松山は高取藩預所より、戒重芝藩預所となる。

角倉の支配地域は、ヘラノキの分布域である菟田野町見田、平井や大宇陀町大東、守道、白鳥居と榛原町の全てを含んでいる。

『奈良県史料二』に見る両代官の支配が接する地域は、同一流域に境界があり、その境界は尾根筋ではなく地理的に判然としない。菟田野町古市場は五條代官所支配地であり、隣村の別所が角倉の支配地である。地理的には一帯となっており、現在の行政区域からは境界が判然としない。

『新訂大宇陀町史』（1992）には「田原の片岡彦左衛門氏方には、文化三年（1806）五月付の『一国四分より御願書之控』と題する一史料がある。これは、当時大和の幕府領を支配していた小堀中務・池田仙九郎・木村宗右衛門の各代官管下の村々に高取藩預所村々を加えた大和幕府領「四分」の惣代共が奈良奉行所へ提出した訴状の控であり」とある。池田但季時代の旧松山藩は、木村宗右衛門代官の支配であった。訴状の内容に「近年、風俗が花美になり、しばしば領主より質素儉約を守るよう触が出され、村役人共いろいろと取り締まっているが、所領が入り組んでいるため、一村で守っても隣村から崩れる有様で、なかなか行き届かない。（後略）」とあり、当時から支配地が複雑であることを窺わせている。田原村は五條代官所の支配地であり、訴状からは各代官の支配地の惣代たち（大庄屋）は地域を越えて連携していたようである⁽¹⁰⁾。

ヘラノキの分布域は五條代官所支配地と一部は角倉代官（当時、木村宗右衛門代官）が所属した役所の支配地であることが判明した。

前述したようにヘラノキは、但季の五條代官時代に苗を取り寄せ植栽された。但季時代の支配地を明確には成しえなかったが、ヘラノキの生育地が但季の支配地の隣接地におよんでいたとしても、地形的には隣り合った同一の流域であり、経済的にも同一地域である。惣代たち（大庄屋）も連携して事にあたっていたことが前資料より推察できる。

「トクオノキ」の名称が伝えられていたのは、榛原町内牧である。後の角倉代官支配地である地域の惣代たちが『老農茶話』に影響をうけ、この地域のヘラノキの起源が但季時代にあるとしても不自然ではない。即ち奈良県に現在野生するヘラノキは、但季時代の植栽を起源とするといえるであろう。

農家に益をもたらすとして植栽されたヘラノキであるが、永常の著作が示す如く、その後はほとんど利用されることはなかったと思われる。五條市や宇陀郡では、永常が利益があるとして命名した「トクオノキ」の名称が、僅かにその時代の名残を留めていたのである。

謝辞

和歌山県のシナノキについては、和歌山市の山本修平氏より資料とともにご教授をいただいた。また、中井の資料の提供をいただいた富永明良氏、標本については元大阪市立自然史博物館の瀬戸剛氏、奈良産業大学北川尚史教授、京都大学総合博物館永益英敏助教授にご助力をい

ただいた。『大和本草批正』については『益軒全集』6を参照し、上原敬二『樹木大図説II』を参照すると共に、文化庁記念物課花井正光氏により原本確認をしていただいた。各位に深謝申し上げます。

注

- (1) 三木茂 (1901-1974) 三木は大正13年に京都帝国大学理学部を卒業した。化石植物、水生植物の研究で知られ、特にメタセコイヤの命名者として著名。大阪市立自然史博物館には「ヤマトユキザサ 大峰 1922.6.20」の標本がある。三木青年はこの年6月に吉野より大峰山系への観察行に出かけたのである。当時は単独での大峰山系行は無理があると思われる。詳細については不明である。なお、三木が標本を京都大学の標本庫に入れた時期についても不明である。
- (2) 『大和植物志』は岡本勇治が生前にまとめたものを基礎に、岡本の死後久米や松村が追補編集したものである。ヘラノキは『大和植物志』本文には岡本が採集したものが欠落している。何らかの理由で岡本の台帳に欠落していたと思われる。他にも岡本が他の書物に記載しているにも拘わらず欠落しているものにエゾエノキがある。産地については、さらに欠落が多い。
- (3) 当時の岡本は、すでに奈良県の植物に関して指導的な立場にあり、奈良県史蹟名勝天然記念物調査会の地方委員を長く務めていた。また今後の研究をまたなければならないが、奈良県師範学校に事務局があった奈良博物研究会など、奈良県における植物観察会の講師をしており、奈良県のフロラに関して第一人者であった。岡本の伝記に関しては北川尚史「奈良県植物研究史」『奈良県史 2』(1990)、同「岡本勇治 奈良県植物研究の先覚者」『覆刻版大和植物志』(1997)がある。
- (4) 小野蘭山は『紀州採葉記』(享和2年、1802)では、長野県塩沢などで「和菩提樹 シナノキ」としている。
- (5) 『本草図譜』については、『本草図譜総合解説』4を参照した。
- (6) 畔田伴存と『紀伊続風土記』の関係については、銭谷武平『畔田翠山伝 もう一人の熊楠』p107-108を参照した。
- (7) 奈良県下北山村前鬼、奈良県ではシナノキは標高1300mあたりから生育しているのが普通である。
- (8) 大蔵永常と池田仙九郎但季とが接触をもつ機縁については、藤井(1998)の以下の論考がある。「ところで、永常の出世作の『農家益』の序文を〈縣令掾奥野秀辰〉が書いているが、この奥野秀辰がどのような人物か不明である。〈縣令掾〉が代官の属僚を意味するとすれば、それは手代か手附を指している(村上直法政大学名誉教授の御教示による)。池田代官の手附に奥野右源太なる人物が存在することについては、既に『第二集』の《参考》の項で紹介している(それは、文化3年のことであるが)。一方、『農家益』が刊行された享和2年の時点で池田代官は大坂鈴木町の代官であった。すなわち、五條代官池田の手附奥野右源太は、池田代官が大坂代官であった享和2年の段階でも池田代官の〈縣令掾〉であった可能性は高く、永常も荒井公廉も大坂で居住し活動していた点も考慮するならば、奥野秀辰と奥野右源太とが同一人物である公算は非常に大であることになる。この推定が当を得ているとすれば、大蔵永常は最初から池田仙九郎と関係を持っていたことになり、大坂代官池田の手附奥野が『農家益』の序文を書き、奥野に依頼を受けた荒井公廉が後序を記したことになる。」である。文中の荒井公廉(1775-1853)は『農家益』(享和二年[1802])の後序を書いた人物である。儒学を学び、寛政七年(1795)に大阪の今橋坊で家塾を開いた。藤井(1994)は、但季が文化2年(1805)に創設した学舎主善館へ荒井公廉が教授として招かれたことを指摘している。ここで荒井は『五条施教』(文化二年刊)を残しているが、主善館については詳細は不明であるとしている。
- (9) 早川孝太郎は「享和二年刊の『農家益』は出版七年後のものであるが、之の再板本の出た頃は、長堀橋本町に住んで(一)、櫛苗をはじめ各種の苗の取次販売をやって居た。(一)農家益奥附。尚初版本と思はれる物には奥附がないから、再版以後のものと思はれる。」としている。なお平井義人(2000)は、「早川氏は「文化七年(1810)の再板あり」と述べているが確認できない。」としている。平井がいう文化七年再版とは「出版七年後」を指摘しているのであろうか。

- (10) この件に関して『新訂大宇陀町史』「第五章 幕末期の大宇陀」p426-447を参照した。幕末には、代官所の支配を越えた村々の連携した行動がみられる。「この年（天保七年のこと）十一月には、五條代官所管下吉野・宇陀・宇智・十市郡村々が連合し、他の幕府領の村々とも歩調をあわせて、安石代を要求する訴願をおこなった。」(p446)などが例としてあげられる。

参考文献

- 岡本勇治(1937→1997).『覆刻版大和植物志』大和精版印刷
 楠瀬雄三(2002).榛原町自明から八滝へ『奈良植物研究会会報』76:11-12
 久米道民(1937).奈良県ノへらのキト其形態ニツイテ.『植物研究雑誌』30:69-73
 小清水卓二(1959).『榛原町史』榛原町教育委員会 664-665
 —————(1961).『十津川 十津川文化叢書』十津川村教育委員会
 小林禎樹・黒崎史平・三宅慎也(1998).『六甲山地の植物誌』神戸市公園緑化協会
 五條市史編集委員会(1987).『五條市史 史料』
 白井光太郎(1933).『樹木和名考』内田老鶴園
 白沢保実(1900).Die Gattung Tilia Japan.『Tha Bulletin College Agriculture Tokyo Imperial University』4(2):155-161
 新訂大宇陀町史編集委員会(1992).『新訂大宇陀町史』大宇陀町
 銭谷武平(1998).『畔田翠山伝 もう一人の熊楠』東方出版
 竹村詠子(1996).かぎろいの丘から西山岳へ『奈良植物研究会会報』60:13-15
 田中太右エ門(1977).へらノキ純林について『奈良植物研究会会報』2:10-11
 田中環(1882).「南海道植物帯調査報告」『大日本山林会報告』8:138-147, 9:198-203
 —————(1887→1985).復刻版『校正大日本植物帯調査報告』ゆまに書房
 谷口熊之助(1917).大蔵常永『農学会報』174
 辻英武(1968).『日本農業の大先達 大蔵永常』日田市
 豊田寛三他(2002).『大分県先哲叢書大蔵常永』
 中井猛之進(1941).植物学ヲ学ブモノハ一度ハ京大ノ芦生演習林ヲ見ルベシ『植物研究雑誌』17:5-21
 早川孝太郎(1943).『大蔵常永』山岡書店
 平井義人(2000).大蔵常永資料集 解題『大分県先哲叢書大蔵常永』4 大分県教育委員会
 藤井正英(1994).『五條社会歴史研究』2 藤井正英
 —————(1998).『五條社会歴史研究』4 藤井正英
 牧野富太郎(1896).糸條書屋植物雑記28『植物学雑誌』10:
 森本喜興(1987).菟田野町日張山青蓮寺を訪れる『奈良植物研究会会報』33:22
 内閣文庫『奈良県史料二』

本草書、農書については以下のものにより参照した

- 岩崎灌園『本草図譜』。『本草図譜総合解説』(1986-1991) 同朋舎出版
 大蔵常永『農家益』。『大分県先哲叢書大蔵常永』1(1999) 大分県教育委員会
 —————『老農茶話』。『大分県先哲叢書大蔵常永』1(1999) 大分県教育委員会
 —————『豊稼益』。『大分県先哲叢書大蔵常永』1(1999) 大分県教育委員会
 —————『除蝗録』。『大分県先哲叢書大蔵常永』1(1999) 大分県教育委員会
 貝原益軒『大和本草』。『益軒全集』6(1911) 益軒全集刊行会
 畔田伴存『和州吉野郡中物産志』。『和州吉野郡群山記』(1998) 東海大学出版会
 —————『熊野物産初志』。『紀南郷土叢書』9(1980) 紀南文化財研究会
 小野蘭山述『大和本草批正』。『益軒全集』6(1911) 益軒全集刊行会
 『紀伊統風土記』。『翻刻版紀伊統風土記』(1910→1990) 臨川書店